

IV 育苗期のいもち病防除について

発病の主な原因は、育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みです。稲残さ（稲わら・籾殻）も伝染源となります。



育苗施設の近傍や施設内に稲わら・籾殻を置かない

○薬剤による防除法

- 1) 種子消毒を行う。防除効果を高めるために、薬液及び浸種水温が10～15℃になるように努める。
- 2) 育苗期いもち防除はベンレート水和剤、ビームゾルのいずれかで必ず実施する（表-1）

表-1 育苗期のいもち防除剤一覧

農薬名	使用時期	箱当たり散布量	備考
ベンレート水和剤	播種時～播種7日後	500倍液 500ml 1,000倍液 1,000ml	かん注
ビームゾル	緑化始期	500倍液 500ml	かん注

注意点

- ・ビームゾルは使用時期が遅れたり、低温時に使用すると葉先が黄化する薬害を生じる。
- ・ベンレート水和剤（苗いもち、苗立枯病防除）の播種時処理は、種子消毒に使用するタフブロック又はエコホープD Jの防除効果を低下させるため体系処理は行わない。

V 水稲育苗終了後に野菜類・花き類を作付けする場合の注意事項について

水稲育苗ハウス内の土壌に薬剤をこぼしたり、薬剤使用後のかん水等により薬剤が浸透した場合、土壌に薬剤が残留するため、水稲育苗終了後に作付けした野菜類や花き類がその薬剤を吸収し、野菜類は残留農薬基準値を超過するリスクが高くなり、花き類は生育障害が発生する場合があります。

○水稲育苗箱の下に敷く不透水性無孔シートの取り扱い

水稲育苗箱の下に敷く不透水性無孔シートは、薬剤が直接ハウス内土壌に触れることや育苗箱に使用した薬剤がかん水により溶け出して土壌に浸透することを防ぐために有効な手段である。使用にあたっては以下のことに十分注意する。

- 1) 育苗ハウス内に無孔シートを敷くときは、かん水後の水が無孔シートの外に漏れないように、無孔シートの周辺を高くするなどの対策を講ずる。
- 2) 無孔シートを重ねて敷く場合は継ぎ目に防水テープを貼るなど、重ねた隙間からかん水した水がハウス内に漏れないようにする。

○残留リスクを軽減する方法

- 1) 育苗箱を畦畔等に運んだ後に薬剤を散布する。
- 2) 田植え同時薬剤散布機を用いる。

病害虫防除指導報

安心のネットワーク

NOSAI

第363号

令和3年3月2日

発行

秋田県農業共済組合
北秋田山本支所

☎0185-54-5540

I 適切な種子消毒の実施について

種子伝染性の病害（いもち病、ばか苗病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病等）は種子消毒により防除しますが、処理方法や水温管理、水の交換等を適切に行い、防除効果を最大限発揮させる必要があります。

防除効果を発揮させる浸種のポイント

- ・浸種水温10～15℃で防除効果が高いため、水温10℃を確保できる4月上旬頃を目安に浸種を開始する。
- ・浸種時の水量は、種子1kgに対し、水約3.5リットルとする。
- ・浸種期間は浸種水温10℃で6～8日、14℃で6日程度とし、安定した薬効を確保するために、水の交換は2～3回とする。浸種は水道水、井戸水で水槽を用いて行い、河川、湖沼の水は使用しない。
- ・塗沫法及び湿粉衣法は、種子表面に付着した薬剤が浸種後水に溶け出し、種子周囲の薬剤濃度が高まった状態で消毒効果が発揮される。そのため、浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換をしない。
- ・未消毒種子は、吹き付け・塗沫済み種子と同じ容器で同時に浸種・催芽をしない。
- ・複数の品種や来歴、防除方法の異なる種子を同じ容器で同時に浸種・催芽をしない。

1. 耕種的防除法

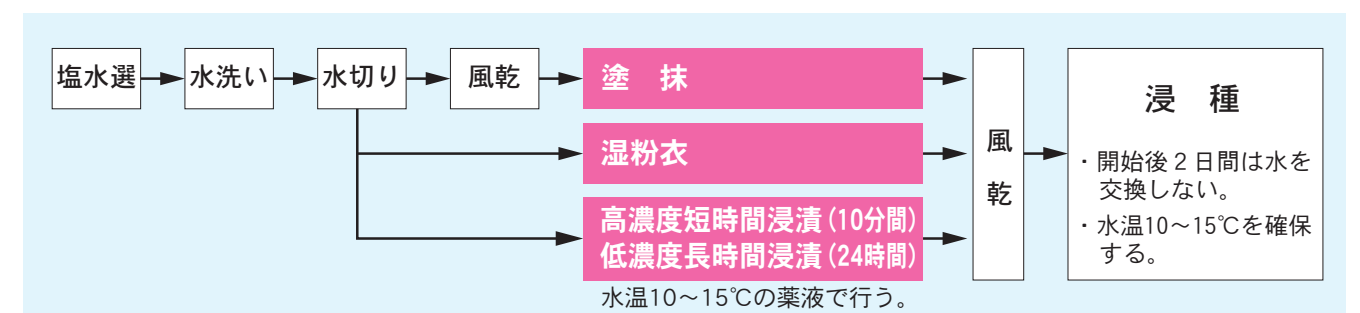
1) 種子更新

種子伝染性病害の発生や各病害による耐性菌の出現を回避するため、自家採種せず、採種は産種子を使用する。

2) 塩水選

- (1) 採種は産種子は比重選済みです。
- (2) 塩水選を行う場合の比重は、うるち品種が1.13、もち品種が1.08で行う。

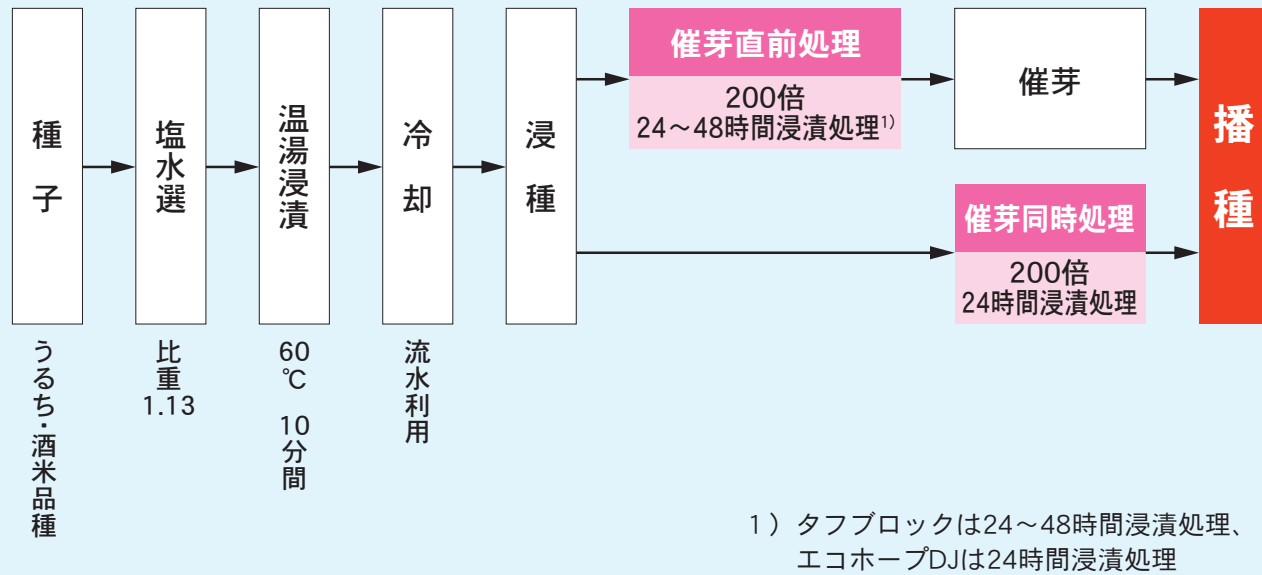
2. 薬剤による防除手順（タフブロック、エコホープD Jは除く）



3. 減農薬栽培に利用できる種子消毒（いもち病、ばか苗病）

温湯浸漬、生物農薬であるタフブロック又はエコホープDJの単独処理は化学合成農薬に比べると防除効果が劣るが、温湯浸漬と生物農薬を組み合わせると、防除効果が向上する。ただし、採種ほ周辺のは場については化学合成農薬による種子消毒を行う。

温湯浸漬法と生物農薬処理の手順



II ばか苗病防除の注意点について

近年ばか苗病の発生が多くなっています。適切な種子予措と環境衛生の徹底が重要です。

- 1) 種子予措をする場所やその周辺から、伝染源となる稲わら、籾殻、米ぬか等を除去し清掃する。
- 2) 薬液及び浸種水温が10～15℃になるように努める。水温が低い場合は温水で調整する。
- 3) 消毒前の種子と消毒後の種子を同じパレットやシート等に置かない。消毒後の種子を載せるパレットやシート等は十分に洗浄したものを用いる。
- 4) 周辺からの病原菌の侵入を防ぐため、浸種・催芽時は容器に蓋をする。
- 5) 催芽は30～32℃で行う。
- 6) ハトムネ催芽器を使用した循環催芽は、発病が多くなる場合があるため注意する。
- 7) 浸種、催芽で使用する機器及び容器は、品種や消毒方法が変わるごとに十分に洗浄する。
- 8) 出芽までの温度が低いと発病が多くなりやすいため、被覆資材等による保温に努める。

III 育苗期の苗立枯病対策について

苗半作といわれるように、健全な苗作りは、移植作業はもちろん、移植後の生育・収量にまで影響を及ぼします。育苗箱内は苗立枯病が発生しやすいため、薬剤による病害虫予防のほか温度管理や水管理にも十分注意してください。

苗立枯病防除体系

使用時期	苗立枯病防除体系		
	播種前	播種時	出芽後緑化始期
播種前に オラクル粉剤、タチガレエースM粉剤又はナエファイン粉剤のいずれかを使用する場合	床土混和 オラクル粉剤又はタチガレエースM粉剤	かん注処理 ダコニール1000 ダコレート水和剤 ベンレート水和剤 ¹⁾	かん注処理 バリダシン液剤5
	床土混和 ナエファイン粉剤	かん注処理 ダコレート水和剤 ベンレート水和剤 ¹⁾	かん注処理 バリダシン液剤5
播種時に オラクル顆粒水和剤、タチガレエースM液剤、ナエファインフロアブル又はヘッド顆粒水和剤のいずれかを使用する場合		かん注処理 オラクル顆粒水和剤、タチガレエースM液剤又はヘッド顆粒水和剤 ダコニール1000 ダコレート水和剤 ベンレート水和剤 ¹⁾	かん注処理 バリダシン液剤5
		かん注処理 ナエファインフロアブル ダコレート水和剤 ベンレート水和剤 ¹⁾	かん注処理 バリダシン液剤5
出芽以降に タチガレエースM液剤又はランマンフロアブルを使用する場合		かん注処理 ダコニール1000 ダコレート水和剤 ベンレート水和剤 ¹⁾	かん注処理 タチガレエースM液剤 ²⁾ 又はランマンフロアブル ³⁾
			かん注処理 バリダシン液剤5

*ダコニール1000、ダコレート水和剤、ベンレート水和剤、バリダシン液剤5は必要に応じて使用する。

1) ベンレート水和剤は、いもち病と同時防除できる。

2) タチガレエースM液剤とダコレート水和剤の播種時の同時かん注は薬害が生じることがある。

3) ナエファインフロアブルとランマンフロアブルの使用時期は緑化始期までである。